

「公的年金」ワークシート 活用マニュアル

1 公的年金制度は、なんのためにあるんだろう？

おじいちゃん、おばあちゃんの公的年金
(1) お父さん(おじいちゃん)とお母さん(おばあちゃん)が、月々どれくらいの公的年金をもらっているか知っていますか？知っている場合は金額を書いてみましょう。
 () 円くらい () 円くらい

(2) もしも、公的年金がなかったら、おじいちゃん・おばあちゃんの暮らしと、自分の暮らしにどのような影響があるか想像してみましょう。

成長したら…
(3) 公的年金は、子どもが大人になり、影響を受けて暮らすことになるのではないのでしょうか。自分も将来、自分自身の生活費を現世代に貯蓄すれば、安心して暮らすことができますか？下の表を見ながら考えてみましょう。

年齢	20歳以降	30歳以降	40歳以降	50歳以降
70歳まで生きるとして	20歳以降	30歳以降	40歳以降	50歳以降
必要な生活費	約100万円	約150万円	約200万円	約250万円
公的年金	約100万円	約150万円	約200万円	約250万円
不足額	0円	約50万円	約100万円	約150万円

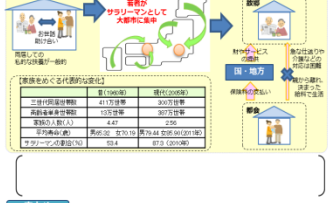
(4) ただ、現実的な観点として(3)のように自分が将来まで生きるとして、下の表を見て、貯蓄と比べて公的年金の優ところは何か考えてみましょう。
【ワークシート(表上)参照】

まとめ
(8) ここまでを振り返って、公的年金制度はどうして必要なのか考えてみましょう。

50年先の「お金」の価値
(5) 20歳から老後に備えて貯蓄を始めることを。貯めたお金を使うのは50年先になります。50年先のお金の価値は「高い」と「低い」の2通りで考えられます。例えば、50年先のお金が100万円ある場合、現在では「100万円」しかありません。しかし、50年先には物価の上昇などによって、基本的な生活費は「100万円」よりも多くなる可能性があります。つまり、50年先のお金は「100万円」よりも価値が低くなる可能性があります。

公的年金制度ができたのはなぜ？
(6) あんなにはるか昔に公的年金制度ができたことになりましたが、その保険料は誰に課税されることになりましたか？
【ワークシート(表上)参照】

(7) 以下のイラストから、歴史的に公的年金制度がどうなってきたかを説明してください。



公的年金制度をより理解するためのファクトシート① = 正確な議論のために

① 公的年金のしくみと仕組み
 ② 公的年金のしくみと仕組み
 ③ 公的年金のしくみと仕組み

公的年金のしくみと仕組み
 公的年金は、国民年金(基礎年金)と厚生年金(会社員)の2種類があります。国民年金は、国民年金(第1号被保険者)と国民年金(第2号被保険者)に分かれています。厚生年金は、会社員が加入する年金です。公的年金は、老後の生活費を確保するために必要な制度です。

公的年金のしくみと仕組み
 公的年金は、国民年金(基礎年金)と厚生年金(会社員)の2種類があります。国民年金は、国民年金(第1号被保険者)と国民年金(第2号被保険者)に分かれています。厚生年金は、会社員が加入する年金です。公的年金は、老後の生活費を確保するために必要な制度です。

公的年金のしくみと仕組み
 公的年金は、国民年金(基礎年金)と厚生年金(会社員)の2種類があります。国民年金は、国民年金(第1号被保険者)と国民年金(第2号被保険者)に分かれています。厚生年金は、会社員が加入する年金です。公的年金は、老後の生活費を確保するために必要な制度です。

この教材のねらい

この教材は「公的年金制度」をテーマに、幅広い議論が展開できるように作成しています。教材は「ワークシート」2枚と「ファクトシート」3枚からなっており、ワークシートに沿って学習を進めながら、適宜ファクトシートを参照することで、議論をより深いものにすることを目指しています。

公的年金制度については、その財源の調達方法や給付の水準などについて世界でも様々な考え方があり、各国によって内容は様々です。個々人の老後の生活設計だけでなく、国の社会経済にも大きな影響を与える公的年金制度は、その国の社会・生活に対する価値観を反映したものと、いえることができます。

従って、設問については、一つの「正しい解答」があるものばかりではありません。

学習を進めるにあたっては、生徒に自由に意見を発表させたり、議論させたりして、主体的に考えさせることに重点を置いたものになるように、

また、指導者も自説を押しつけることなく、ともに議論を深めるようなスタンスで取り組んでいただくようお願いします。

この教材を通じた学習が、公的年金のあり方や、保険料を納める意味、少子高齢化への対応などについて、自ら考えるきっかけとなり、社会の一員としての自覚を身につけることにつながれば、大きな学習の成果であると考えられます。

学習指導要領との関係

このマニュアルに沿った学習は、公民科・家庭科の教科目標達成に資するものと考えられます。

(公民科の教科目標)
 「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う」

(家庭科の教科目標)
 「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる」

1 公的年金制度は、なんのためにあるんだろう？

おじいちゃん・おばあちゃんの公的年金

(1) 自分のおじいちゃん・おばあちゃんが、月々どれくらいの公的年金をもらっているか知っていますか？ 知っている場合は金額を書いてみましょう。

(知っている ・ 知らない) 月々 () 円くらい

・基礎年金：約6万6千円 厚生年金：約16万5千円 (平均月収36万円の場合)

(2) もしも、公的年金がなかったら、①おじいちゃん・おばあちゃんの暮らしと、②自分の暮らしにどのような影響があるか想像してみましょう。

①
・生活費がなくなって、欲しいものや必要なものが買えないかもしれない

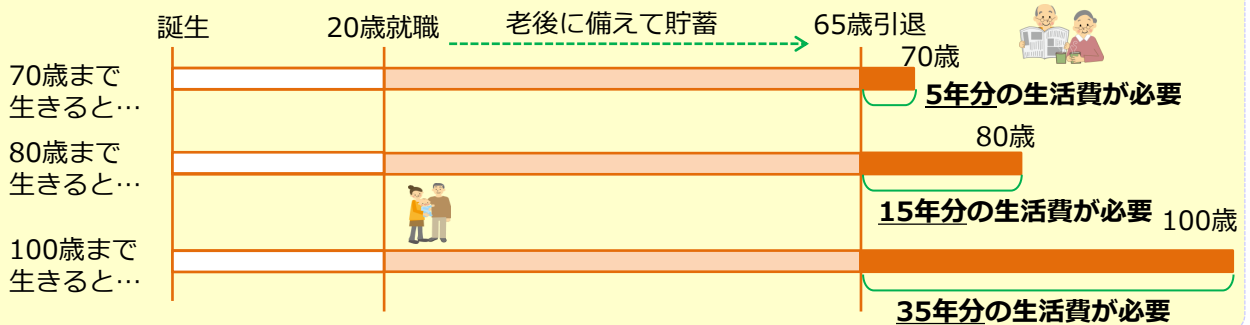
②
・家族が仕送りをしたり、同居して世話をする必要が出てくる。
・収入のない親の面倒をみるために転職や引っ越しも必要になる場合もある。

長生きしたら…

(3) 公的年金も、子どもからの仕送りもなく、老後に備えて貯蓄しないといけないとします。あなたなら、何年分の生活費を現役時代に貯蓄すれば、老後に安心して暮らせると思いますか。下の図を見ながら考えてみましょう。

() 年分の生活費

仮に、65歳で引退して70歳まで生きるとすると、老後に備えて70-65=5年分の生活費を貯蓄しておく必要があります。80歳までだと15年分、100歳までだと35年分が必要です。



(4) ただ、現実的な問題として(3)のように自分が何歳まで生きるか予想できません。下の会話を見て、貯蓄と比べて公的年金の良いところは何か考えてみましょう。

【ファクトシート②左上参照】

現役時代に貯蓄して老後の生活費を賄うためには、自分が何歳まで生きるか予想できないため、実際に必要となる生活費よりもかなり多めに蓄える必要がある。一方で、公的年金ならば、亡くなるまで年金給付を受けられることができるため、たとえ長生きしたとしても、安心して老後の生活を送ることができる。



大丈夫。生活費を10年分くらい貯蓄すれば老後は安心だね。

でも、長生きしたらどうしよう…？たくさん貯蓄しても、老後は収入がないから、お金がどんどん減っていくことを考えると不安だなあ。



おじいちゃん・おばあちゃんの公的年金

<p>1 (1)</p>	<p>★ねらい 導入として、おじいちゃん・おばあちゃんが仕事を引退しているにもかかわらず生活ができているのは「公的年金をもらっている」ためであるということを確認してもらう。この時点では、必ずしもいくら公的年金をもらっているかということは知らなくてもよい。</p> <p>(参考)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎年金：約6万6千円（保険料を40年間納めた場合の満額） ・厚生年金：約16万5千円（現役時代の平均月収36万円の場合） <p>※ 基礎年金は定額だが、厚生年金は給料が高いと給付額も高くなる。</p>
<p>1 (2)</p>	<p>★ねらい もしも公的年金がなければ、おじいちゃん・おばあちゃんの生活が困るだけでなく、自分たち若者も、親世代を養わないといけなくなることを理解する。（公的年金は、高齢者のためだけでなく、現役世代のためにもあり、世代と世代の支え合いの仕組み。）</p>

長生きしたら…

<p>1 (3)</p>	<p>★ねらい もしも、「公的年金」も「子どもからの仕送り」もなければ、働いている間に老後に必要な生活費を貯蓄しなければならないことを理解する。 また、自分が何歳まで生きるのかは予測できないため、個人でそれを貯蓄することは困難であることを理解する。</p> <p>★解説 （亡くなる年齢 - 仕事から引退する年齢）年分の生活費が必要となる。 長生きすれば、その分だけ老後の生活費がかかるため、何才まで生きると考えるかによって、回答が異なることになる。</p> <p>(参考1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平均寿命：男性約79才、女性約86才（2011年、厚生労働省） ・65才からの平均余命：男性約19年、女性約24年（2011年、厚生労働省） <p>(参考2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・老後1ヶ月の生活費：60代世帯で約30万円、70代世帯で約22万円 （2011年総務省統計局 家計調査より推計）
<p>1 (4)</p>	<p>★ねらい 貯蓄にはない公的年金のメリットの1つとして、「長生きに備えることができる」という点を理解する。</p> <p>★解説 1 (4) では、自分の寿命を仮定して、何年分の生活費が必要か計算したが、実際には、自分が何才まで生きるかはわからない。現代は、100才まで生きるのも珍しくない時代。もしかしたら、長生きして、老後の生活費が多くかかってしまうかもしれない。</p> <p>公的年金なら、亡くなるまで受け取ることのできる（終身で保障されている）ため、こうした“長生きのリスク”に対応することができる。</p>

50年先の「お金」の価値

(5) 20歳から老後に備えて貯蓄を始めるとすると、貯めたお金を使うのは約50年先になります。①50年前と比べてお金の「価値」がどのように変わったか、また、②公的年金はどのように対応してきたかを考えてみましょう。【ファクトシート②左下】参照

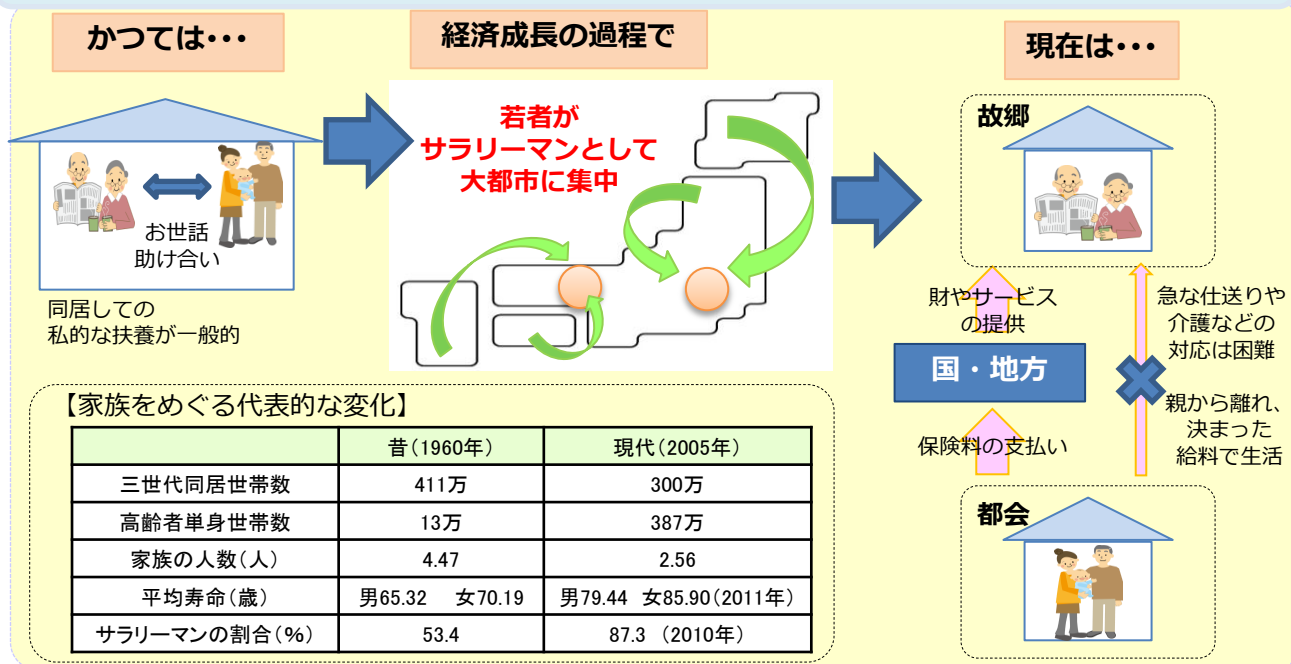
- 老後に備えて若い頃にお金を貯蓄したとしても、
 - ・ 50年前に比べて、現在の物価（物の値段）は（ 高いため ・ 低いため ）、
 - ・ 50年前に貯蓄したお金の価値は、現在では（ 上がって ・ 下がって ）しまっている。
- 一方、公的年金の場合は、物価の上昇などに応じて、基本的に年金額は、（ 増える ・ 減る ）仕組みとなっており、年金額の実質的な価値を保障している。

公的年金制度ができたのはなぜ？

(6) あなたはもうすぐ公的年金の保険料を払うこととなりますが、その保険料は何に使われることになるのでしょうか。【ファクトシート①右上】参照

（ 自分の老後のために積み立てられる ・ 今の高齢者の年金になる ）

(7) 以下のイラストから、歴史的に公的年金制度がどんな背景で整備されてきたのかを読み取って、説明してみましょう。【ファクトシート①右上】参照



かつては、昔は親と同居して農業や自営業と一緒に営む人が多く、自分で親を養っていた。現代は、都市で会社勤めをして親と別居する人が多くなり、平均寿命も長くなったため、親を養うための費用が大きくなってきており、自分で親を養うことが難しくなっている。こういった社会の変化の中で、社会全体で高齢者を支える公的年金制度が整備されてきた。

まとめ

(8) ここまでを振り返って、公的年金制度はどうして必要なのか考えてみよう。

- ・ 長生きのリスクに対応できること (3) (4)
- ・ 経済状況（物価や賃金など）の変動に対応できること (5) など
- ・ 現代では、自分の親を養うことが困難になっていること (7)。

50年先の「お金」の価値

1 (5)	<p>★ ねらい 貯蓄にはない公的年金のもう1つのメリットとして、「インフレなどに対応できる」という点があることを理解する。</p> <p>★ 解説 ファクトシート②左下の通り、50年前に比べて物価（物の値段）は上がっている。（たとえば、はがき1枚は、50年前なら5円、現在は50円。仮に、50年前に「100円」を持っていれば「20枚」買えるが、現在なら「2枚」しか買うことができない。）若い頃に貯蓄したとしても、年をとった時に物価が上がっていれば、そのお金の価値が「目減り」してしまう可能性もある。</p> <p>公的年金なら、こうした「物価上昇（インフレ）のリスク」にも対応できる。具体的には、物価が上昇すれば、それに応じて年金額も増額する仕組み（物価スライド）となっている※。実際、1970年代の石油ショックの際も、物価スライドにより、年金額の実質的な価値が保たれている。</p> <p>※ 2004年以降、少子高齢化に対応して、現役世代の負担能力に見合うよう、年金額が自動的に調整される仕組みが導入されており、物価や賃金の伸びと比べ、年金額の伸びは抑えられる仕組みとなっている。</p>
-------	---

公的年金制度ができたのはなぜ？

1 (6)	<p>★ ねらい 公的年金の保険料は自分の老後のために積み立てられているのではなく、その時々の高齢者の公的年金の支払いに充てられていること（世代間扶養）を理解する。</p>
1 (7)	<p>★ ねらい 公的年金は、昔は「個々人で自分の親を養っていた」のを、核家族化や都市化などを背景に、徐々に「社会全体で高齢者を養う仕組み」として整備されてきたものであることを理解する。</p> <p>★ 解説 かつては、昔は親と同居して農業や自営業を一緒に営む人が多く、親から家・土地などの生活手段や、農地・お店といった生産手段を譲ってもらう中で、個々人で親を養っていた。</p> <p>現代は、都市で会社勤めをして親と別居する人が多くなり、平均寿命も長くなったため、親を養うための費用が大きくなっている。また、産業化により、親のもつ生産手段に縛られずに仕事をする者も多くなってきている。こういった社会の変化の中で、「個々人で親を支える」ということが難しくなってきたため、「社会全体で高齢者を支える」公的年金制度が整備されてきた。</p>

まとめ

1 (8)	<p>★ ねらい ここまで学習したこと（なぜ公的年金制度が必要か）についてまとめてもらう。</p> <p>★ 解説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公的年金なら、個人の貯蓄や、民間の年金保険では実現が困難な、 <ul style="list-style-type: none"> ・長生きリスクへの対応（終身保障）が可能 ・物価や賃金の変動への対応が可能（物価スライド、賃金スライド）などのメリットを持っていること。 ・また、もし公的年金がなければ、自分で親や祖父母を養わなければならないということ（また現代ではそれが困難なこと）を総括できればよい。
-------	--

2 「私たちの世代」の公的年金を考えよう

「公的年金」に対する私たちのイメージ

(1) あなたは公的年金制度にどんなイメージを持っていますか？年金は50年後、あなたの老後の支えになってくれると思いますか？またその理由は？周りの人にも意見を聞いてみよう。

・自由に公的年金制度に対するイメージを書いてもらう。

・周りの人の意見も聴いてもらう。

「保険料を払わない」ってどういうことだろう？

(2) もし、公的年金の保険料を払わないとすると、以下の場合、どうなるのでしょうか。

① 65才で、仕事から引退した場合、

(老齢年金を受け取ることができない)

② 25才で、交通事故にあつて、重い障害が残った場合

(障害年金を受け取ることができない)

③ 30才で、一家の稼ぎ手として働いているときに、子どもを残して亡くなった場合

残された夫や妻は、(遺族年金を受け取ることができない)

(3) あなたはもうすぐ公的年金に加入することになりますが、きちんと保険料を払いますか、できれば払いたくないと思いますか。また、それはなぜですか（国民年金保険料額約15,000円/月）。

(払う ・ 払わない)

理由 ・自由に思ったことを書いてもらう。

(4) あなたのまわりで、下のような理由で、国民年金の保険料を払わない人がいます。それぞれの理由に対して、あなたは、どのように声をかけますか？

【ファクトシート①右下】参照



➤ 結局、保険料を払っても、将来、公的年金は受け取れないんですよ。保険料を払っても、損をするんじゃない？

- ・公的年金は、長生きしたり、障害を負ったりする「リスク」に備えるもので、そもそも「損得」で考えるものじゃないんじゃないかな。
- ・公的年金の費用の一部には税金が入っているし、保険料を払わなくて公的年金がもらえなくなると、公的年金の税金に見合う給付分も受け取れなくなってしまふよ。
- ・国が一生給付を保障してくれる安心感は、数字では表せないものだと思うよ。

➤ 保険料を払いたいんだけど、経済的に苦しくて払えないよ。公的年金を受け取るためには、どうしたらいいのかな？



お金がなくて保険料を払えないなら、保険料の免除をしたらいいんじゃないかな。学生なら学生納付猶予というのがあって、働き始めてから保険料を払うこともできるよ。

2 (1)	<p>★ ねらい 公的年金のイメージについて、自由に書いてもらう。若者と高齢者、男性と女性などで回答に違いがあるか考えてみるのもよい。</p>
2 (2)	<p>★ ねらい 「保険料を払わない」期間が長くなった場合※、高齢になったとき、思わぬ事故や病気で障害が残ったときや、一家の働き手が亡くなったときに「公的年金をもらえなくなる」ことを理解する（個々人の負担と給付の関係）。 (みんなで支えあうしくみであるからこそ、自分だけが協力しないで権利を得ることはできないことになっている。) 逆に、しっかりと保険料を納めていれば、高齢になったときだけでなく、障害の場合や遺族を残してしまった場合に公的年金がもらえることを理解する。</p> <p>※ 公的年金の保険料を払うことは法律上の義務となっているが、保険料を払わなかったとしても、ただちに公的年金を受け取れなくなる訳ではない。 たとえば、20才～60才の40年中原則25年間保険料を納めるか、免除を受けることが、老齢基礎年金を受ける要件となっている。(もちろん、40年間保険料を納めることが原則であるため、25年間しか保険料を納めない場合、受け取る年金額は、「満額(66,000円/月)×25/40」となってしまう。)</p>
2 (3)	<p>★ ねらい 「保険料を払わない」ことによるデメリットを理解した上で、国民年金保険料を払うかについて、自由に書いてもらう。</p>
2 (4) <前段>	<p>★ ねらい 保険料の“払い損”という言葉について考えてみることで、「リスクに備える」という保険の考え方を理解する。</p> <p>★ 解説 公的年金は、長生きや障害を負うリスクに対応するものであり、個々人の保険料と年金額を比べて「損か得か」という話ではない。たとえば、長生きしたり、障害にあたりた場合は、生涯受け取る年金額は多くなるが、これが果たして「得」と言えるだろうか考えてみるのもよい。 現役時代に保険料を払わなかった場合でも、基本的に税金は負担している。このため、保険料を払わないことは、公的年金に含まれる税金に見合う給付分(基礎年金の半分)も受け取れないことになるとも言える。</p>
2 (4) <後段>	<p>★ ねらい 経済的に苦しく保険料を払えない場合に、免除制度や猶予制度という手段があることを知る。</p> <p>★ 解説 経済的に苦しく保険料が払えない場合には、保険料の免除制度を利用することができる(所得に応じて、全額免除の他、4分の1、2分の1、4分の3の免除がある)。免除が認められれば、老後は公的年金のうち税金に見合う給付分は受け取ることができる。 一方、学生や若年者で保険料を払えない場合には、保険料の猶予制度を利用することができる。こちらは、免除制度と異なり、後から保険料を納めること(追納)が前提となっており、追納しなければ老後に公的年金を受け取ることができない。様々な方法で保険料を納めやすい仕組みになっており、保険料を納める義務は果たせるようになってきているため、保険料の未納にはならないようにしなくてははいけない。</p>

「私たちの世代」の公的年金を考えよう

(5) 少子高齢化が進む中での今後の公的年金制度の在り方を考えてみましょう。

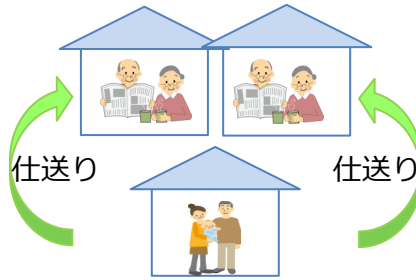
【ファクトシート②右】参照

- 今後「少子高齢化が進む」ということは、【公的年金を通じて社会全体で親世代を養う場合】も【公的年金ではなく自分で親を養う場合】のいずれにしても、
 - ・生まれてくる子ども[兄弟姉妹]の数が（**少なくなり**・多くなり）、
 - ・1人の子どもが養わなければならない親の数は、（少なくなる・**多くなる**）

【公的年金を通じて社会全体で親世代を養う場合】



【公的年金ではなく自分で親を養う場合】



(6) 少子高齢化が進む中では「老後世代の安定」と「若年世代の負担」の両方への配慮が必要になります。子ども、親はどうすればいいと思いますか？

【ファクトシート②右】参照

- 子どもは、できる限り親の生活が不安定にならないよう、無理のない範囲で保険料[又は仕送り]を（**増やす**・減らす・払うのを止める）。
- 親は、子どもの負担が重くなりすぎないように、年金給付[又は仕送り]を（たくさん求める・**少し我慢する**）。

(7) 少子高齢化に対応して、公的年金制度にどのような仕組みが組み込まれているか、調べてみましょう。【ファクトシート②右】参照

将来、高齢者の割合が増えるため、若者が負担する保険料は今よりも少し上がる。
（厚生年金：16.8%→18.3%、国民年金：15,040円→16,900円（平成16年度価格）
しかし、それ以上は上げないよう、次のような対策がとられている。

- ① 平成21年度から、基礎年金に税財源が2分の1投入されることになった。
- ② 年金給付は、少子高齢化に対応して、年金額を調整する仕組みになっている。

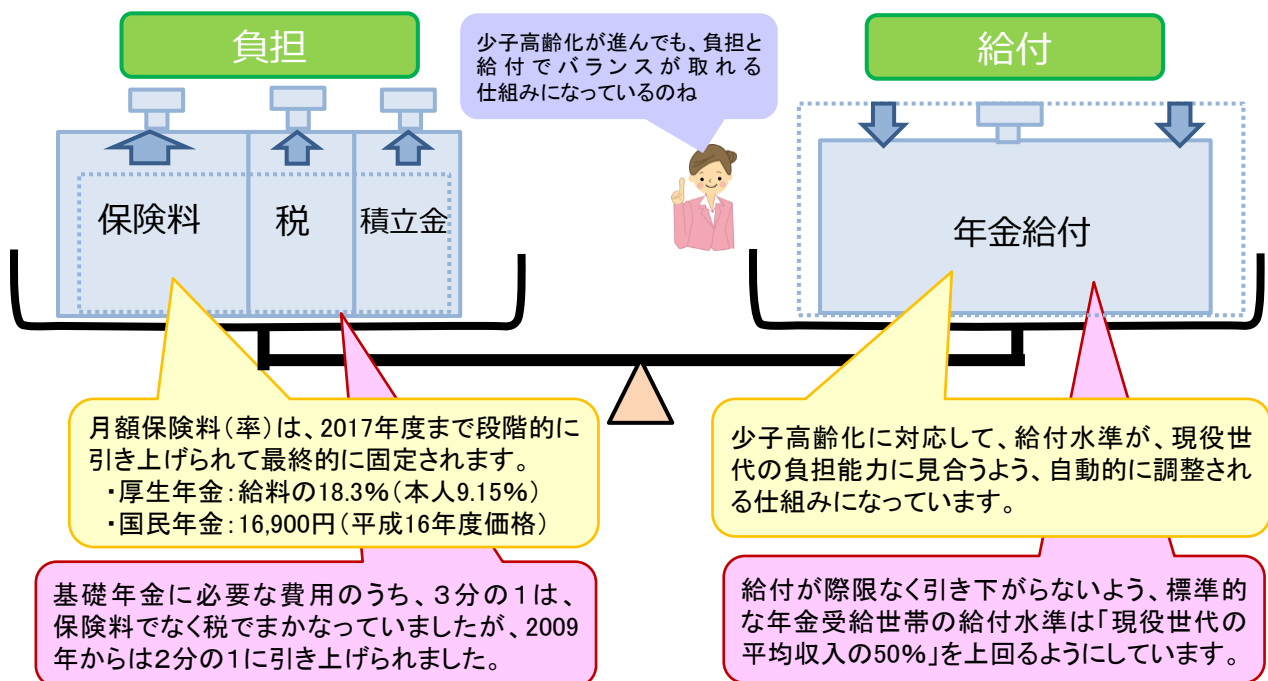
(8) 高校を卒業して就職すれば厚生年金に加入することになります。また、大学に進学しても、20歳になれば国民年金に加入することになります。今後、あなたは公的年金とどのように関わっていこうと思いますか？

・ワークシート・ファクトシートを踏まえて思ったことを自由に書いてもらう。

➤ 日本の公的年金制度は「国民皆年金」。全員が加入して、一生涯関わるものよ。公的年金制度を信頼できる制度とするために、私たちにできることを考えてみましょう。



<p>2 (5) (6)</p>	<p>★ ねらい 「少子高齢化の中での公的年金の負担と給付のあり方」について、「公的年金ではなく自分で親を養う場合」と比較して考えてみる。 公的年金制度があろうとなかろうと少子高齢化の下で支え手の負担が重くなることは同じ。そうした中で、国はどんな対応策があるのかを考えてみる。</p>
<p>2 (7)</p>	<p>★ ねらい 少子高齢化に対応した公的年金制度の仕組みを調べ、「現役世代の負担」と「高齢世代の給付」のバランスをどのようにとっていけばよいかについて、考えを深める。細かい仕組みを知ることよりも、負担と給付の考え方の理解に重点を置くようにする。</p> <p>★ 解説 現在の公的年金制度は、少子高齢化の中でも、現役世代の保険料の負担が重くなりすぎないようにしています。具体的には、現役世代の支払う国民年金や厚生年金の保険料に上限を設けている（平成29年以降、国民年金 月16,900円、厚生年金18.3%）。</p> <p>「負担」と「給付」のバランスを図りつつも、これ以上の保険料を上げないよう、「負担」の面では、基礎年金に税財源が2分の1投入されることになり、これまで積み立てられてきた積立金も今後は取り崩していく計画になっている。</p> <p>また、「給付」の面では、少子高齢化に対応して、年金額が自動的に調整されるような仕組みになっている（下図参照）。</p> <p>公的年金制度は現役世代が負担した保険料や税などを高齢世代に分配しているに過ぎない仕組みであり、少子高齢化が進むと制度がもたないといったものではない。少子高齢化の下で、いかにして支え手を増やし、支えられる者を減らしていくのか、様々な取り組みを行っていくことが大切。</p>



<p>2 (8)</p>	<p>★ ねらい これまでの学んだことを総括してもらう。(公的年金制度に対するイメージの変化や感想などでもよい)</p>
--------------	--